スポット展示「デーノタメ遺跡が語るもの」

デーノタメ通信 vol.5

・・・縄文のタイムカプセル・・・

ウルシは日本の基層文化だ!

北本市教育委員会文化財保護課　平成 29 年 10 月 23 日発行

左の漆塗土器は、第４次調査の泥炭層中から出土しました。いずれも加曽利Ｅ式の浅鉢形土器で、赤いウルシがはっきりと残っていました。

漆

図１　赤い漆を塗った土器の出土状況（デーノタメ遺跡第４次調査）

１　デーノタメ遺跡の漆塗土器

デーノタメ遺跡の第４次調査は、主に縄文時代中期の泥炭層を調査しました。約 5,000 年前のⅡａ層と呼ぶ泥炭層を掘り下げると、すぐさま多量の土器が姿を現し、驚いたのは、その中に赤や黒の漆を塗った土器が多く含まれていたことです。

近年、泥炭層の調査が全国各地で行われるようになってきました。しかし、縄文時代中期の泥炭層調査は全国的にも事例が限られているため、デーノタメ遺跡の中期の漆塗土器は大変珍しい事例といえるのです。

デーノタメ遺跡の漆塗土器は、関東地方に分布する加曽利Ｅ式という土器のうち、浅鉢形土器が大半を占めています。深鉢形土器は主に煮炊きに使用されるため、漆は主にモノを盛りつける浅鉢に塗られていたようです。色は黒と赤の２色を基調としますが、まずは黒色を下地とし、その上に赤色で模様を描いたり、立体部分の文様を際立たせたりする傾向がうかがえます。

図２　口縁を赤く縁どりした土器

図３　隆帯に赤漆を塗った土器

現在、漆工芸は東北地方や北陸地方の一部に残る「伝統工芸」というイメージですが、デーノタメ遺跡は、5,000 年前の足元の遺跡に、すぐれた漆工芸の技術が存在していたことを教えてくれるのです。

2　ウルシの木はどこから伝わったか

実は、英語の japan は「ウルシ」を意味しています。ウルシこそは日本の基層文化の一つなのです。

さまざまな工芸品に塗られるウルシの正体は、ウルシの木からにじみ出る樹液です。縄文人たちは、ウルシの樹液を採取し、精製し、水分を蒸発させ、顔料を混ぜてウルシを利用していました。しかし、ウルシはかぶれるというだけではなく、その利用の工程はとてもデリケートで、高度な知識と技術を必要とします。縄文人はどうやってその技術を習得したのでしょうか。

日本ではウルシの木は自生せず、栽培管理されたものだけが存在します。自生地として知られるのは中国だけですが、１万数千年前の福井県鳥浜貝塚（縄文早期）では、すでにウルシの木が確認されているのです。

果たしてウルシの木は、日本に自生していたのか、それともはるか昔に中国から伝わってきたのか、謎は深まるばかりです。

図４　ベンガラと思われる赤い顔料

図５　ウルシを塗る際のパレット土器

茨城県大子町の「大子漆」を訪ねる!!

国産漆の産地としては、岩手県の浄法寺漆が有名で、全国の約８割を生産しています。そして、第２位の生産地が茨城県大子町の大子漆です。

大子漆はとても品質の良い漆として知られ、現在、生産者と町、NPO の方々が一体となり、漆文化の継承に取り組まれています。

「漆の森」という漆畑で、漆掻きの様子を見せていただきました。ご案内いただいた益子さんは、漆掻きを始めて 10 年とのこと。「今は漆掻きが楽しくて仕方ない」と笑顔で話してくださいました。

日本の漆文化について考える１日となりました。

手入れされた漆畑

ウルシを掻く益子さん

にじみ出るウルシ液